

## ★成熟期の高温の影響により白未熟粒が増加 ★カメムシ被害も多く、次年度は防除の徹底を！

### 1 今年度の君津地域の水稲の生育を振り返って

3月下旬の気温は低く推移したものの、4月に入ると気温が高く推移し生育が急激に進行しました。4月下旬は日照時間が低下した一方で、5月上中旬の気温は平年並み～やや高め、日照時間は平年並みに推移したことから、移植後の苗の生育は順調に進みました。

5月下旬は、寡照条件で推移したため、一時的に生育の抑制が見られたものの、6月以降は気温・日照時間ともに平年より高く推移したため、6月下旬時点で草丈はやや高め、分けつもやや多めに推移しました。7月以降も高温条件が続き、全ての品種で生育が1～2日程度早い傾向が見られました。

成熟期について、「ふさおとめ」は8月7日頃から、「ふさこがね」は8月12日頃から、「コシヒカリ」、「粒すけ」は8月21日頃からとなり、いずれの品種も平年より早い収穫を迎えました。高温の影響で草丈が高く、コシヒカリを中心に倒伏被害が多くみられたほか、白未熟粒の発生など品質低下につながりました。

病害虫については、今年カメムシ類の発生が過去10年で最も多くなり、カメムシによる不稔籾や斑点米の発生が多く確認されました。特に早生品種では被害が多く、品質低下の主要因にもなっています。その他、富津市を中心に生育後半で葉が白く枯れる白葉枯病が多発し、減収したほ場が多く確認されています。

### 2 今年度の君津地域の作況概況について

関東農政局発表の本県の作況指数（10月25日現在）は「105」であり、平年よりやや高い数値となっています。君津地域を含む南房総地域はやや良の「106」となりました。

品質について、カメムシによる斑点米や高温による白未熟粒の増加による等級の低下が目立ちました。

### 3 来年度に向けて

#### ① 高温対策

地球温暖化の影響により、水稲の生育期間に当たる3～8月の平均気温は上昇傾向にあります。気温が高くなると、水稲の生育ステージの前進化による管理の遅れ、初期生育が旺盛となり過剰分けつ・倒伏リスクの増加、白未熟粒発生等の影響を受け、収量・品質の低下を招きます。

これら高温障害への主な対策としては、①秋耕による稲わらの分解、②ケイ酸施用、③葉色に応じた追肥の実施、④適切な水管理、⑤高温登熟耐性品種の選択が挙げられます。前年作の稲わらの分解が不十分だと、メタンガスの発生（ガスわき）を助長し、根痛みによる生育阻害を引き起こします。根の伸長・活性は高温障害の抑制につながるため、秋耕を実施しガスわきを抑えましょう。移植後のガスわきが多い場合は一時的に落水し、ひどい場合は溝切りの実施により土壌中に酸素を供給してください。続いて、ケイ酸は稲の茎葉の強さを高めて倒伏軽減が期待できるほか、根張りを良くすることで高温障害の軽減効果も期待できます。また③について、出穂期に葉色が低下すると白未熟粒が増加する傾向があります。出穂期前7～5日で葉色が淡く、出穂期後14日の最低気温が高く予想される場合は、窒素成分で1kg/10aを上限に追肥を検討してください。ただし、基肥一発肥料を使用している場合は、使用した肥料の溶出タイミングを確認し、過剰施肥にならないよう注意してください。水管理については、中干しを終えた幼穂形成期から出穂後2週間程度は湛水管理、収穫までは間断かんがいを実施し、限りある水資源を有効に活用し玄米品質の低下を防いでください。

この他、ふさおとめは高温登熟耐性が高い品種となっており、今年の高熱条件でも他品種に比べて1等比率を高く維持しています。自身の作付計画を見直し、高温登熟耐性品種の導入も検討してください。

## ② カメムシ対策

気温の上昇と作期拡大に伴い、カメムシの発生量が多くなっています。一部のカメムシは水田周辺の雑草地で越冬・増殖します。稲の被害を軽減するためには、水田周辺の草刈りを適切に実施することが重要です。畦畔の除草作業は出穂期の2週間前程度までに済ませましょう。一方、カメムシの種類によっては水田内に直接飛来してくるものもあり、特に「イネカメムシ」の発生量が増加しています。カメムシ類の被害が多発している地域については、薬剤散布による防除も併せて実施しましょう。イネカメムシに対しては、スタークル粒剤やキラップ粒剤等を、成虫が飛来を始める出穂期前に散布し、その後乳熟初期（出穂期7～10日後）に幼虫が多い場合は追加散布の実施が効果的です。



図1：イネカメムシの成虫（茶色）

## ③ イネばか苗病対策

イネばか苗病菌は、収穫した稲わら、米ぬか、籾殻等に存在し、翌年の伝染源となります。イネばか苗病の発生が見られたほ場では、稲株をすき込んで土中に埋没させることで菌密度を下げることができます。また、浸種、催芽、播種等といった、種もみを扱う作業場が汚染されていると、イネばか苗病が感染してしまう可能性があります。作業場やその周辺はよく清掃し、稲わら、米ぬか、籾殻などが無いように清潔に管理しましょう。

種子消毒を行う際には、化学合成農薬を使い、農薬のラベルに記載されている希釈倍数や処理時間などの使用方法を守ってください。また、消毒時の水温は10～15℃の範囲とし、浸種時の水替えは静かに行うよう注意してください。減農薬栽培に取り組みされるなど、微生物農薬を使用する場合は、温湯消毒と組み合わせることをお勧めします。

水稻採種ほ場の周辺200メートル以内に一定割合でイネばか苗病が発生しているほ場があると、収穫したもみは種子として扱えなくなってしまいます。君津地域は県内で有数の種子産地です。地域全体での対策をお願いします。

## ④ 白葉枯病対策

今年は富津市を中心に白葉枯病の発生が多く見られました。白葉枯病は細菌性の病気で、高温多湿条件で多発します。感染すると葉の両端から白く枯れ、稔実不良や稲体の枯死を引き起こし、拡大すると大幅な減収に繋がります。病原菌は水を介して伝染するほか、稲わらや雑草で越冬するため、発生したほ場周辺では来年も発生する可能性が高いと予想されます。

本病は感染後の防除が難しいため、箱施用剤や本田用殺菌剤による予防が効果的です。ルーチンコア箱粒剤や、オリゼメート粒剤などの適用剤を選択し、発生予防につとめてください。

また、本病気は多肥栽培によっても発生を助長します。多収品種を中心に発生が多く見られていることから、発生ほ場においては品種の変更や施肥量の見直しを検討ください。

## ⑤ セーフティネット制度への加入

カメムシ被害や高温障害、病気の発生による減収が散見されます。今年は米価が昨年よりも高くなりましたが、自然災害等様々なリスクに備えるため、ナラシ対策や収入保険など、セーフティネット制度への加入も御検討ください。

## ⑥ 多年生雑草（オモダカ、クログワイ、コウキヤガラ）対策

これらの雑草の塊茎は低温や乾燥に弱いため、よく乾燥するほ場では冬季の耕うんにより塊茎を地表面に出して寒気にさらすことで、塊茎を枯死させることができます。これらが多発するほ場では、除草剤にかかるコスト及び作業量低減のためにも、耕種的防除を心掛けましょう。

## ⑦ イノシシ等鳥獣被害の抑制

落穂や二番穂が残っていると、イノシシ等の鳥獣の餌場になります。いったん餌があることを覚えてしまうと、ほ場への侵入を繰り返すようになり、翌年の水稻被害につながりやすくなります。イノシシ等が侵入してくる地域で、稲刈り後にまだ耕起できていないほ場は、できるだけ早く耕起し、餌場にならないようにしましょう。

### ⑧ 健苗育成のため温度管理

苗半作という言葉があるように、健苗育成が水稻栽培の第一歩です。水稻の育苗では、最適温度が育苗ステージによって刻々と変わります。図2を参考に適切な温度管理を実施しましょう。

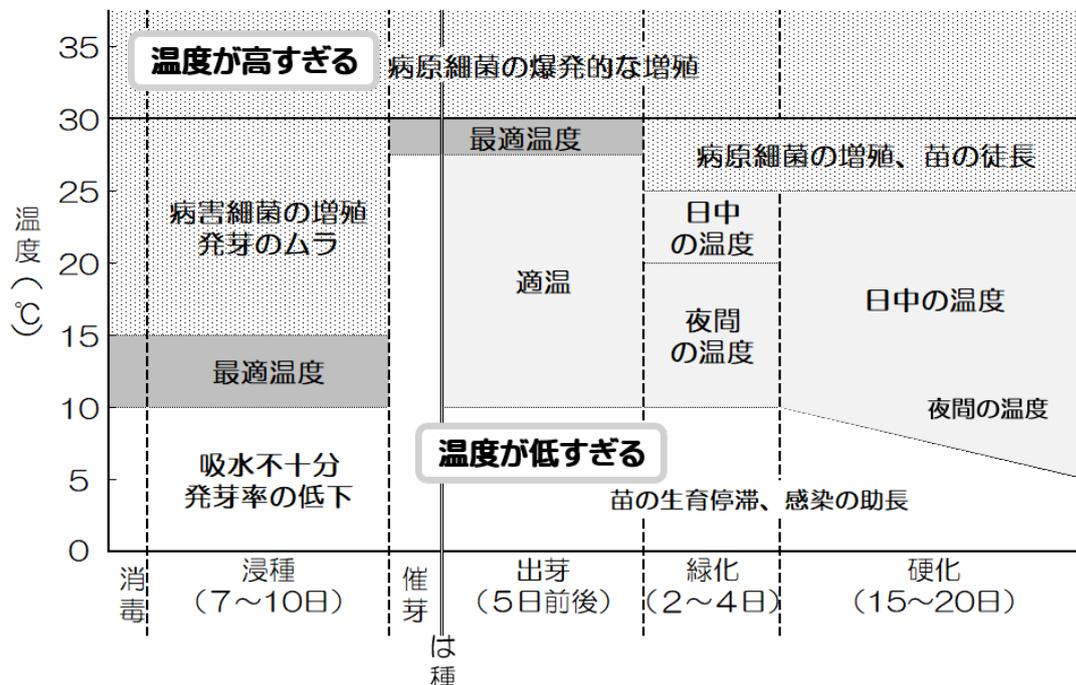


図2 育苗時の温度管理

### 4 種子保証票の保管について

種子保証票は、種子産地や種子生産者を確認できる、重要なものです。種子を原因とする事故が起きた時には保証票が必要になりますので、捨てずに収穫時まで大切に保管しましょう。

### 5 三島ダムからの用水を使用している皆様へ

三島ダム洪水吐改修工事を行っております。改修工事が完了するまで、引続きダム水位を下げ運用されますので、用水は大切に使用してください。冬の間、畦畔等の漏水箇所を補修しておきましょう。

令和6年度の稲作では大変お世話になりました。来年以降も引き続きよろしく申し上げます。  
御不明な点等ありましたら、お気軽にお問合せください。

通信費削減のため、「あぜみち」の配信を、郵便から電子メールまたはFAXへの切替えを進めています。切替えを希望の方は、下記まで御連絡ください。

連絡先 富澤（とみさわ） kimitu-f@mz.pref.chiba.lg.jp 0438-23-0299（電話）